※ ウ リ 姫 コ

昔、じいさんとおばあさんと、ウリから生まれたウリ姫コという娘がいた。だんだん大きくなって、機をおるようになった。

ある日、じいさんとばあさんが豆をまくにいくことになった。二人はウリ姫コに誰が来ても戸をあけるなといって出ていった。しばらくするとアマノジャクがやって来て、戸を少しあけてくれと云った。はじめはことわっていたが、少しあけるとアマノジャクは、戸をガラガラとあけて入ってきて、モモを取りに行こうといった。アマノジャクはゾウリをはいていこうというが、ウリ姫コはケタケタ鳴っていやだという。次は下駄、次はおぶっていこうというが、どれもだめだというためガリガリとひっぱっていった。

モモの木の下につくとアマノジャクは、木にのぼって熟れたモモをどんどんとってたべた。ウリ姫コも一つとってくれといったら、青いのや虫くされのモモをくれた。もっとうまいのをくれろといったら、自分で登ってとれという。登ってはみたが手のとどくところには、一つもなっていないので、小枝の方へ行ったため枝が折れて死んでしまった。

アマノジャクは、ウリ姫コの皮をはいで、それを着て知らない顔をして家に入っていた。その夜のら犬がきて人でない匂いがするとほえたてたのでアマノジャクとわかり、じいさんや村人たちに打たれて死んだ。死体をカヤ株の上をひきまわしたため、カヤ株は血でそまり、今でも赤いのだという。